

Eveline Hillの《家意識》

— James Joyce の “Eveline” (*Dubliners*) に関する考察 —

梅 津 義 宣

‘Home Consciousness’ of Eveline Hill

— A Study on James Joyce's “Eveline” (*Dubliners*) —

Yoshinobu Umetsu

Abstract

The motif of ‘home’ in James Joyce's “Eveline” (*Dubliners*) resounds like a metronome throughout the story, suggesting the moral compulsions that hypnotize consciousness and exclude the possibility of meaningful change. In this trial of the soul, Eveline Hill, the heroine, serves as both prosecutor and defendant analyst. As she weighs emotion and romantic fantasy against the judgmental voice of conscience, she engages in an exercise of deliberate misprision that sacrifices free will to those ‘Irish gods of hearth and home’ she has been taught to worship from early childhood. Abandoned by her mother and bereft of conscientious care, Eveline submitted to a compulsive need to become the mother sacrificed on the altar of Dublin domesticity. She must offer herself as social victim to a demanding patriarch who threatens incestuous entrapment.

The purpose of this paper is to look into the motif of ‘home’ especially ‘home consciousness’ of Eveline Hill in James Joyce's “Eveline” (*Dubliners*). Restrictions by ‘home’ represent typical paralysis of Dublin in the days of the author. Paralysis is not only ‘local’ spiritual sickness but also the ‘universal’ condition of the diseases of human beings. The approach is chiefly based on the following points — 1) motif and construction of the story 2) life of the author 3) style and rhetoric.

Key Words

bonds, courage to change, Dublin domesticity, home consciousness, Irish gods of hearth and home, marriage, paralysis, patriarchy, replication of mother, rhetoric and style, romantic fantasy, social victim, stream of consciousness, women in Irish society

I. はじめに — 短篇 “Eveline” の成立と意義 —

短篇 “Eveline” は、アイルランドの首都ダブリンの郊外に生まれた作家 James Joyce (1882 - 1941) の短篇集 *Dubliners* (1914年出版) の4番目にあり、[青年期] を扱った第2期の最初の作品である。制作の順序では “The Sisters” に続く2作目であり、1904年9月10日号の “The Irish Homestead” に掲載され、後に改作された。本短篇は *Dubliners* に収められ

※ 所属：総合人間科学部 人間心理学科 [英語・英米文学専攻]

た15篇の中でも最もよく整った作品の一つとすることができる。ダブリン市郊外に居住する下層階級に属する人びとの内面を単純に描き出した“Eveline”は、終始、さりげない淡々とした語りと単純な筋で構成され展開されるが、その内容は決して軽い小作品とは言い難い。むしろJoyceの創作上きわめて重要な意味を持つ作品と位置づけられるだろう。

“Eveline”は、アイルランド特有の、古びた〈「伝統」という名の獄舎〉に縛られ、しかも自ら進んでこれを一蹴する勇氣すら持てない、脆弱で惨めな少女（Eveline Hill）をリアリティックに写し出している。本作品が創作後ほぼ一世紀を経て、われわれ読者の胸に強く迫って来るのは、これが当時のダブリンにしか通用しない「閉鎖された偏狭な文学作品」ではなく、「普遍性を持ったリアリズム文学作品」としての卓抜した文学的特性を有しているという事実である。真に普遍的なものは、時代や場所との繋がりを持たずには断じて存在しないことを“Eveline”は（*Dubliners*に収められた他のすべての短篇と同様に）豊かな説得力をもって示唆していると言えるだろう。

*Dubliners*を構成するそれぞれのストーリーに共通するモチーフは「麻痺」（paralysis）であると言ってもよい。作品に登場するダブリンの人びとの「麻痺的病状」は、Joyce特有の多様な修辭的技法が巧妙に駆使され、リアリズムを基調としながらも、象徴性と幻想性が程よく溶け合う巧緻な文体の効果を得心に見事に描き出されている。このようにして、ダブリンにまつわる〈精神的麻痺の映像〉は、時と空間を超えて、現代の読者の連想の網目にも鮮明に焼き付けられることとなる。さらに付け加えるならば、当時（1903年ごろ）のダブリンの人びとの心の奥に巣くう「麻痺的病状」を特徴づける主要な要因の一つに「束縛・執着」が挙げられる。同時に、「束縛」の対極次元に在る「逃避」もまたJoyceの好みとする意図的なモチーフであることに留意したい。

本論文の目的は、“Eveline”における足枷（束縛）の根源とも考えられる〈家・家庭〉の位置づけと〈家意識〉について考察することにある。この考察（文学的分析）の主な手掛りとなるのは、先ず、本作品のモチーフへの接近であり、さらには、作者James Joyceの用いた修辭的技法の特異性である。これらの文学的分析の基盤には、作者の生涯、時代的（歴史的）背景、さらには、当時の芸術論の潮流などに関する確かな理解も肝要な条件として位置づけられる。本考察では、短篇“Eveline”を成り立たせている〈生と死〉、〈夢と現実〉などの対立するイメージと主要なモチーフ「精神的麻痺」との連関について、単に文体論的考察に偏重することなく、総合的・複眼的な文学的考察となることを目指したいと思う。

II. Eveline Hillとその《家庭》

短篇“Eveline”は、*Dubliners*の中でも最も短い一篇である。19歳の娘Eveline Hillは名前が作品のタイトルとして用いられる唯一の人物であり、「精神的・麻痺」の病状の自覚を徐々に失ってゆく当時のダブリンの人びとの姿を象徴的に代表する人物（主人公）として登場する。

*Dubliners*を構成する15篇の作品は、被支配者階級の人びとが抱える鬱結した「精神的麻痺」の病的様相を浮き彫りにしている。この「麻痺」は、当時のダブリン（ひいてはアイルランド）の人びとの「無気力な精神的状況」を象徴する常套語と言っても差し支えない。「麻痺」の誘因となるものは歴史的・政治的・経済的・社会的・文化的・宗教的・倫理的などのあらゆる分野に求めることができるが、中でも彼らの「活力」の根源と考えられるダブリンの《家

(庭)の在り方と、そこに居住する人びとの《家意識》にその淵源・誘因を求めることができると言っていいだろう。

この物語(“Eveline”)の冒頭のパラグラフに記される3つの文章の中に、「窓辺に座る一人の女性(主人公のEveline Hill)の姿」と「彼女の内面の意識」が暗示的に描き出されている。

- (1) She sat at the window watching the evening invade the avenue. Her head was leaned against the window curtains and in her nostrils was the odour of dusty cretonne. She was tired. (p. 42)

この描写は、停滞し、希望が薄れ、澁んだ雰囲気と情景を織り成している。また、“the evening invade the avenue”の文中で繰り返される“v”音の響きは、この物語の中心人物の名前Evelineをも含め、物語の基底となる響きと流れを設定している。“invade”という語は、夕闇が迫りくることを予測させているが、「なにか恐ろしいこと」の到来をも印象づけている。「黄昏」の想起は「未決定」の状況を暗示するとともに「予測不可能な未来への不安と危惧に満ちた躊躇」の心況をも映し出している。この女性の動作に注目したい。ただ「座って」、窓のカーテンに頭を「もたせかけて」いるだけである。「窓」は外の世界に開かれた「好機」を暗示する言葉とも理解できるが、この女性はその傍らに座っているだけで、動かない。この後に続く「鼻孔には埃っぽいクレトン更紗の匂いがしてくる」の表現は、前文の表現と合わせると、彼女の〈受身的な〉姿勢を一層強調していると読み取ることができる。Warren Backが指摘するように、「最初の2文は、第3の文の簡潔さの中で、倦怠感を凝縮し、強調している」のである¹。この女性の疲弊した様子には単に肉体的なものだけではなく、精神的にも、心理的にも追い詰められ、疲れ切っている様子が滲み出ている。日常生活の〈埃〉の匂いを嗅ぎながら、心の決まらない状況の中で、ただ、窓辺に座って、物思いに沈み続ける主人公の姿が設定されている。物語冒頭のパラグラフの描写は、明らかに物語のモチーフである「麻痺」を暗示しているとも言えるだろう。次に、第2パラグラフの「書き出し」の部分に注目してみたい。

- (2) Few people passed. The man out of the last house passed on his way home ; she heard his footsteps clacking along the concrete pavement and afterwards crunching on the cinder path before the new red houses. (p. 42)

窓から見える単純な情景描写ではあるにせよ、“Few people passed.”という表現には、やはり、「ダブリンの人びとが罹患している〈精神的麻痺の病状〉から敢えて抜け出る人はほとんどいない」という「無気力」のモチーフの暗示する含蓄のある技法が重ねて用いられている。——この“Few people passed.”の表現も主人公の「彼女」の見た印象なのか、「語り手」の叙述なのか鮮明ではないが、むしろ、この曖昧性こそ、両者の声を重ね合わせ、合一させる作者の意図であるとも言えるだろう。そして、第1・2パラグラフに示される短い文の連結は、視点を「語り手」から「主人公」に移すための橋渡しでもある。——「はずれの家から出てき

1 Warren Beck, *Joyce's Dubliners: Substance, Vision, and Art* (Durham N. C. : Duke University Press, 1969), p. 118.

た男が帰りの途を歩いてゆく」——窓辺に座る「彼女」は、その足音が“clicking”「こつこつ」と鳴り、そして“crunching”「こつんこつん」という足音に変わるのを聴く。初めは、この男は固いコンクリートの舗装道路を歩き、やがて、石炭がらを敷いた道を踏んでゆく足音が捉えられている。「赤く新しい家」に入ってゆくこの男は所謂“invaders”の一人である。一方ダブリンの一般の人びとは「茶色の小さい家」に住む。この二色の家、「赤い家」と「茶色の家」は北アイルランドの都市ベルファストからやって来た富裕な人びとと貧しいダブリンの一般庶民とを差別するものである。

——カーテンに触れ、匂いを嗅ぎ、足音を聴き、色を見る——これらの感覚に関わる表現（描写）は、物語における「彼女」の役割を十分に描き出している。（また、このような描写の手法によって、物語の「語り手」としての「彼女」の位置を不動のものにしようとしている意図が感じ取られる。）やがて、「彼女」の想いは、子供時代へと遡ってゆく。「かつてあそこには原っぱがあって、毎夕よその子供たちといっしょに遊んだものだった。」一人ひとりの友達の名前が脳裡に浮んで来る。思い出は自分の家族のことにまでおよび、人間関係も濃密であったことを懐かしむ。「あのころは楽しかった。父はそう酒癖が悪くなかったし、それに母も生きていた。」悲哀と諦念に満ちた情感が漂う中で回想が続く。「遠く過ぎ去った過去」は良かったが、「すべては、所詮、移り変わるもの…」と自らを納得させようとする。兄も姉も自分も成長し、大人になった。母も死んでしまい、友人の中にもすでに他界したものもいる。イギリスに帰っていった家族もある。すべてのこと、すべての人びとは「ここを去ってゆく」ことを想う。

第2パラグラフの中で、“house”（5回）と“home”（2回）が7回繰り返し用いられ、「想い」の焦点が「家」にあることが読み取れる。このパラグラフの結びの部分と、それに続く（第3の）パラグラフの結びの部分と、それに続く（第3の）パラグラフの始まりの部分と下記に引用してみたいと思う。

- (3) That was a long time ago ; she and her brothers and sisters were grown up ; her mother was dead. Tizzie Dunn was dead, too, and the Waters had gone back to England. Everything changes. Now she was going to go away like the others, to leave her home.

Home! She looked round the room, receiving all its familiar objects which she had dusted once a week for so many years, wondering where on earth all the dust came from. (pp. 42-43)

第2パラグラフの結び：“Now she was going to go away…to leave her home”を受けて、第3パラグラフは“Home”という強烈なことばで始まる。まさに、ここは、「家」の重みを実感し、それを再認識する瞬間である。Katie Walesが指摘するように、“Anadiplosis”——段落の末尾の語を次の段落の文頭に置いて反復する修辭的技法——により、「彼女」の胸に深く刻まれている「家」の存在とともに《家意識》が鮮明に浮き彫りになる²。このような技法による反復は、読者の視覚に訴えかける強調効果もさることながら、読者の内面的聴覚に訴えかけて音韻的な強調効果を意図したものであると考えることができる。

彼女は「自分の家」の部屋を見廻して、長い歳月の間、「親しみ馴染んだもの」をもう二度

2 Katie Wales, *The Language of James Joyce* (London : Macmillan Education Ltd., 1992), p. 41.

と見るものがなくなるだろうという〈不安感〉〈心の揺らぎ〉を覚えながら過去へと想いを巡らせてゆく。「壊れたままの足踏み式リードオルガン」(“the broken harmonium”)、メルボルンに行ってしまった(名前も判明しない)司祭の「黄ばんだ写真」(“(the) yellowing photograph”)、神が福者マーガレット・メリー・アラコックさま(Blessed Margaret Mary Alacoque)に約束を賜った場面を描いた「色刷りの版画(“coloured photograph”)」、そして、家族で家族の平和を祈っていた頃のことなどが脳裡に蘇ってくる。

自然主義的描写によって表現されるこのパラグラフの中で重大な意義を持つのは、「精神的・情緒的に麻麻したEveline自身の生活と象徴的に一致するもの」としてこれらの物品や事柄が記されている点である。「神が福者マーガレット・メリー・アラコックさまに約束を賜った場面を描いた色刷りの版画」がそれである。その「版画」は、「壊れたままの足踏みリードオルガン」や「黄ばんだ(司祭の)写真」とともに、単に、部屋の中の侘しさだけを暗示するものではない。「聖女が神と約束をした」ことを示す版画は、Evelineに「かつて母との間で取り交わした約束」を(ダブリンの脱出の直前に)思い出させる契機となる。さらには、St. Alacoque(1647-90)が十代前半に患ったリュウマチと麻痺が、Evelineが「波止場」で突如「麻痺の病状」に陥り動けなくという話の伏線として重要性を持つ。こうして古びた室内の自然主義的描写は一層リアルなものとなり、同時に、この物語に一層深みのある象徴性を賦与することにもなるのである。(“the broken harmonium”、“(the) yellowing photograph”の〈broken〉〈yellowing〉は「破壊・破滅」、「枯渇・衰退・死」などを象徴する言葉である。)

(4) She had consented to go away, to leave her home. (p. 43)

「彼女」は「出て行くこと、〈家〉をあとにすることを承知してしまった」のである。(それは必ずしも自分の主体的な意志ではないことを自ら告白するという振れた文体で書かれていることに留意したい。)果たしてそれは賢明なことであろうか。「家」におれば、何とか暮らしてもゆけるだろう。周りには知人もいて、助け合って生活することもできるだろう。勤めている店を辞めてもさほど悲しいことでもない。問題は「家」である。これまでと同じ生活を繰り返すのか。それとも、外国へ出かけ全く新しい生活(人生)を始めるのか。親しい近隣の人びとに囲まれた生活を続けるのか、あるいは、はるかな未知の世界へ飛び出してゆくのか。ダブリン脱出のことは自分にも言い聞かせたことではなかったのか。逡巡によって生活(人生)の計画が浮き草のように浮遊する。ここには主人公の確固たる信念などは微塵も見られない。

(5) But in her new home, in a distant country, it would not be like that. Then she would be married—she, Eveline. People would treat her with respect then. She would not be treated as her mother had been. (p. 44)

物語の中心人物の名前がここで始めて言及される。彼女の名は《Eveline》。年齢はすでに19歳になっている。当然〈独立〉できる年頃である。Clive Hartが指摘するように、Joyceは《Eveline》の名前を慎重に選び、意味深い使い方をしている³。Evelineは“a little Eve”のイメージをもって、幸福であった無垢な子供時代を思い返す。この頃は、質素な生活ではあったが「エデンの園」を想起させるような、充足感に満ち溢れていた。楽しく遊んだ“field”(原っぱ)

は、今はなくなっている。皮肉なことに、この物語のEvelineは「エデンの園」の“Eve”とは違って、誘惑に挑戦する勇氣は持っていない。したがって「過ちを犯す」機会に巡り合うこともない。「樂園」におけるEveのような〈墮落・追放〉の経験もない。それなのにEvelineは「全く嫌な生活」(a wholly undesirable life)でもない現状を捨てようとしている。

III. Eveline Hill と Frank

振子のように揺らいでいたEvelineの思いが、ここで新しい方向へ展開してゆく。

- (6) She was about to explore another like with Frank. Frank was very kind, manly, open-hearted. She was to go away with him by the night-boat to be his wife and to live with him in Buenos Ayres where he had a home waiting for her. (p. 45)

ここで、前の引用文(3)と同じ“Anadiplosis”の修辭的技法が再び用いられる。Evelineの恋人Frankという名前を文末と次の文頭で繰り返し用いている。この“Frank”というネーミングは引用文(3)で用いられた“home”とは〈対極〉に位置づけられているが、このような〈対照〉による強調はかえってEvelineの内面にある葛藤を明白に表明していると言えるだろう。「Frankはとっても親切で、男らしく、心を開いてくれている」という言葉は、この場面で気づいたことではなく、むしろ、Evelineが自分に念を押し、自己確認をしようという思いが表現されている。ここには、Evelineの期待、不安、焦燥、憧憬、興奮、安堵、逡巡、そして自尊心など、複雑に混じり合った心境が見え隠れする。

新世界「ブエノスアイレス」(Buenos Ayres)はカトリック教徒の多いアルゼンチンの首都であり、多くのアイルランド人たちが移住していった地であると同時に、Eveline Hillにとって「新しい人生」を始めるのに相応しい地である。都市の名は(スペイン語で)「良い空気」という意味を持つ。〈埃〉に塗れたダブリンの空気とは対照的である。(Evelineの部屋も埃に満ちていた。cf. 引用文(1): …in her nostrils was the odour of dusty cretonne. (p. 42)) 「ブエノス・アイレス」はEvelineの夢を適えるには良さそうな都市に思われる。——しかし、ここに在る保証はFrankの「口約束」だけで、他には何らの頼りとなる根拠もない。

確かに〈家〉はEvelineにとって〈牢獄〉であった。埃に満ちた老朽化した〈家〉に住み、遊ぶための公園などはなく、カトリック教徒の住宅地に近接する空地をプロテスタント教徒が買い込んで同宗派用の家々を建てたということから、Evelineを取り囲む環境が貧しかったことを充分に感じさせる。今やEvelineは、〈ダブリンの家〉とFrankが誘う〈ブエノスアイレスでの家庭生活〉との《はざま》に在って、そのどちらかの選択を迫られている。

新世界への旅立ちを心に決めようという積極性とそれを抑える消極性との相反する感情が交錯し合う。慣習と苛酷な義務に束縛された苦しい生活の容認か。それとも未知の国への愛の逃避行を勧めるFrankに随従するか。この二者択一の選択を迫られるEvelineの心の葛藤は、しだいに深刻な情緒不安定の様相を強めてゆく。どちらの道もEvelineには、厳しくて容易には

3 Clive Hart, “Eveline”, *James Joyce's Dubliners, Critical Essays*, ed. by Clive Hart (New York: The Viking Press, Inc., 1969), p. 49.

決断しがたい選択肢である。気持が揺れ動き、優柔不断な姿勢へと繋がってしまう。このような振幅は、そのまま、この物語の筋、心理的展開、イメージリーの支配構造を決定し、〈変化〉と〈反変化〉の間、〈熱狂的な行動〉と〈凍りついた不活発 (inertia)〉の間の《対立》となる。この《対立》は、作品の言語にも反映し、物語前半に見られる気持ちの沈み込んだEvelineの不活発な言語は、Frankのことを想像する際の彼女の興奮した言葉遣いと対照をなしている。

主人公のEvelineは、洞察力が乏しく、他者の目ばかり気にかけて、物事をその表面だけで捉えてしまうことが少なくない。例えば、Frankに対する評価がそれであった。(Frankに対する「語り手」の客観的な説明が一切なされないことにもよるのだが) 読者はすべてEvelineの意識・認識をとおしてしかFrankを知ることができない。彼女は自分自身を疑うことはあっても、Frankのことは全面的に信じ、彼が南米ブエノス・アイレスに〈家〉があるから一緒に暮らそうと言ったことをそのまま真に受けていた。Frankはその名のとおり、物語の表面から受ける感じでは、「Evelineに愛を惜しみなく与える」青年で、人柄も「とっても親切で、男らしく、心を開いてくれている」(‘very kind, manly, open-hearted’ (p. 45)) 青年の役割を演じている。しかし、Joyceが〈ひねり〉を利かせた名前(Frank)の解釈は、ともすれば、“frank”: ‘ingenuous, open, candid, outspoken’ (COD) というようなものである可能性が充分考えられる⁴。この解釈が妥当だとすれば「(率直で、開放的で、気取らないが) ずけずけと遠慮なくものを言う」性格の持主ということになる。このように不透明なFrankの性癖はEvelineにしてみれば樂觀できない不安の源ともなり得る。しかし、一方、Evelineの新世界にかける夢は大きい。その夢を実現してくれるのはFrankただ一人である。当時の社会状況では、「騙される」という不祥事も起こらないという保証もない。そして、Evelineの内面には《家意識》が潜在しており、《脱出への憧れ》が大きいほど二つの対立する極面に置かれた彼女の心の揺らぎは増幅する。彼女にはEveline Hillといるフルネームがあるが、彼はFrankというファーストネームだけで苗字を持たない。ここにも両者の間に在るぎこちない「不均衡」が垣間見られる。Evelineはすでにダブリンを脱出することに決めていたが、離愁と感傷に浸るうちに、唯一の「頼り」とする恋人Frankに対する不信任などが心中で混じり合う。ここでは侘しいダブリンの〈家〉と連結する「悲惨な生活」に対する疎ましい気持ちが次第に薄らいでゆく過程が映し出される。描写の大部分はEvelineの視点によるものであり、彼女の意識に浮かぶままの〈連想の形〉を取っている。

Evelineは埃っぽい沈滞したダブリンの生活に比べて、明るく前向きで確実な生き方をしてるように見えるFrankの中に、強さ、優しさ、生氣、楽しさのようなものを感じ取っている。知り合った二人は交際を重ねるようになる。しばしば逢い引きの機会を持ち、FrankはEvelineの家まで送るようになるが、彼女の父親は「水夫」だから、と受け容れようとはしない(“I know these sailor chaps,” he (Eveline's father) said. (p. 46))。歌劇「ボヘミアの少女」(*The Bohemian Girl*)の観劇に誘われたこともある。豊かな大理石の広間の夢を描き出すこの歌劇の世界は、茶色の埃っぽいダブリンの世界の対極に在る。Derek Attridgeがその象徴的な意味を指摘するように、ボヘミアの少女はEvelineの正反対の極に位置する姿である。

4 Clair A. Culleton, *Names and Naming in Joyce* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1994), pp. 91-92.

Frankに連れられて観劇に出かけるという行為は、EvelineがFrankとともに送ろうとしている新世界での生活の「予行演習」のようなものである⁵。Evelineは「ボヘミアの少女」に憧れ、Frankに連れられて、新世界に行くことを期待する。

しかしながら、EvelineとFrankの「関係」を注意深く観察すると、この二人の関わりには、Evelineの側からの積極的・主体的な愛情表現はほとんど感じ取れない。Evelineは、まず、「異性の交際相手」(“a fellow”)を得て喜び、やがて相手に好意を感じる(“to like him”)ようになる。この件の文が、「Frankは遠い国の話を話ってくれた」という文に次いで置かれていることには、この物語のモチーフの解釈上、注目すべき意味があると考えられる。

Evelineはロマンチックな空想の世界にFrankを位置づけ、「夢」を構築してゆく。「影」のような存在とも言えるFrankの人物像は、Evelineにとってもよく理解できない不可解な人物(“merely somebody”)であるように映る。この二人の関わりは、12の短文で構成される一節で述べられるだけである(pp. 45-46)。この「簡潔さ」は、二人が「見知らぬ人(同志)」(“the status as stranger”)の関わりを越えなかったことを裏書きしている⁶。

IV. 《家意識》からの解放(ダブリン脱出)は成るのか

物語の終盤に近い部分にはいつて、物語冒頭の場面描写が再び繰り返される。

- (7) Her time was running out but she continued to sit by the window, leaning her head against the window curtain, inhaling the odour of dusty cretonne. (p. 46)

具体的に冒頭部(引用文(1))と同じイメージを用いて、類似した場面が再び切り開かれる。「窓ぎわに座ったまま」「窓のカーテンに頭をもたせかけ」「埃っぽいクレトン更紗の匂いを吸い込む」——文字どおり〈同じ言葉〉を繰り返し、《動かない》Evelineの姿を強調的に浮き彫りにしている。Evelineは《動かない》だけではない。同じ匂いが漂う、空気すら動かない「澱んだ；活力のない」空間の中に埋もれているEvelineの姿をそこに観ることができる。「海の向こう」「ブエノス・アイレス」が象徴する「新鮮な空気」とは対比的に描き出される「ダブリンの埃」が、重苦しい鬱陶しさをもってEvelineを包み込んでしまっているようである。

Evelineは依然として座ったまま、過去のこと、現在のこと、そして未来のことに感傷的な夢を馳せている時、並木通りの向こうから「手回しオルガン」の調べが聞こえてくる。その「哀愁を帯びたイタリアの曲」は〈ダブリンの外の世界〉から聞こえてくる響きのように感じられる。確か、この曲は母が危篤状態であった《あの晩》に聞いた曲と同じ曲だ。「できるだけ長く家事の世話をする」との母との約束のことも蘇ってくる。同時に「平凡な、犠牲の連続の生涯が、最後に狂乱状態で最期を迎えることとなった」母の姿を目のあたりに浮べる。Evelineは、ここで、「典型的なダブリンの母親の役割」を譲り受けていることを再認識することになる。

母との約束を守ることになれば、Evelineは母と同様に酷使され、自由を剥奪され、狂気に

5 Derek Attridge, “Reading Joyce,” *The Cambridge Companion to James Joyce*, ed. by Derek Attridge (Cambridge : Cambridge University Press, 1990), p. 7.

6 Domic Heid, *The Modernist Short Story* (Cambridge : Cambridge University Press, 1992), p. 69.

終るかも知れないとの危惧と恐怖を感ずる。やがてEvelineの言葉は緊張したものになり、迷い続けた心中の焦りは最高潮に達する⁷。「突然恐怖の衝動に駆られて」(In a sudden impulse)「脱出！脱出しなければならない」(Escape! She must escape!)との内面の声を読者は聞く。しかし、最後の決断の時に当面してもEvelineの心はFrankに対して十分に開かれ、委ねられているとは言えない。「Frankは自分を救ってくれるだろう。生を、そしてたぶん愛をも与えてくれるだろう。でも、まず、自分は生きていたい!!」「生」か「愛」か——優先順位の争いがEvelineの心の中で起っている。Evelineにとって「愛」は第二義的な条件に過ぎないことが終結に向かうプロットの中で明らかにされてゆく。切れ切れの意識が彼女を「無力感」と「幽閉の感覚」へと追いつめてゆく。まさに「麻痺の病状」の極地である。

Evelineの「麻痺の病状」を暗示するかのように、Joyceは〈家〉から駅に向かうEveline自身の行動にさいて何も描いてはいない。「Evelineはノース・ウォール（北埠頭）の駅で右往左往する雑路の中に立っていた」とだけ記され、彼女の硬直した姿が露呈されているだけである。波止場の巨大な岸壁と群衆は、Evelineにとっては〈阻止するもの〉に見えてくる。Frankが自分に話しかけ、渡航のことを繰り返して話している時も、Evelineは一言も応答できない。ただ一つ「できること」と言えば、「無言の熱い祈りに唇を動かし続けること」だけである。船の「長く悲しそうな汽笛」が耳にはいり、「船体の真っ黒い塊」(“the black mass of the boat”)が目にはいり、ぎりぎりの選択・決断の時が訪れる。しかし、ここで見せるEvelineの姿勢は〈受け身の祈り〉の姿だけである。そこには、「愛」と「犠牲」の〈はざま〉に起るはずの「問題意識」とか「苦悩」はおろか、「〈Frank〉・〈家〉どちらかの選択（選別）」の過程に当然生じるはずの「困惑」「葛藤」「煩悶」などの感情は微塵も読み取ることはできない。ただ「混惑の渦の中から私を救い、お導きください。私の〈義務〉を教えてください」という祈りだけが委縮しきったEvelineの口から弱々しく囁かれるだけである。

鐘の音がEvelineの内的世界に響きわたるとき、「世界中の海」が押し寄せるような圧迫感を覚える。「自分を救ってくれるだろう」と期待していたFrankが、今、自分を海の中に「引きずり込み」「自分を溺死させよう」としているようにさえ思われてくる。物語の中でEvelineがFrankに疑惑を持ったと感じさせる暗示的表現はないが、それを表現しようとする微々たる気力すらなかったと理解することもできる。窓の傍らに「立ち上り」、決断し、自由になろうとする瞬間はあった。しかし、この物語終結の場面で、Evelineは「立っている」だけでなく、「両手で鉄棒にしがみつき (clutched)」、「鉄柵を握りしめる (gripped)」というふうに行動の変化と推移を示す。その行動の推移は明らかに〈不活発で否定的な様相〉を示唆している。

物語の最後は、視点が移り、Frankによる「視点重視」の形を取ってイメージの文字化がなされている。叙述は、波止場の状況とEvelineの萎えた思考との間を去来し、作品全体を覆う〈静止〉を示す語法とこの場面での彼女の〈狂乱〉を示す語法とが鋭い対比となっている。

- (8) He rushed beyond the barrier and called to her to follow. He was shouted at to go on but he still called to her. She set her white face to him, passive, like a helpless animal. Her eyes gave him no

7 John Paul Riguelme, “Metaphors in the Narration: ‘Eveline’, Harold Bloom, ed., *James Joyce’s Dubliners* (New York: Chelsea House Publishers, 1988)”, p. 75.

sign of love or farewell or recognition. (p. 48)

この結びの部分で、Evelineは「無力な動物」のように硬直し、〈家〉も、埃に満ちたダブリンからも脱出することはできない。彼女は動物に喩えられているが、人間らしさを失ったことを暗示するものなのだろうか。愛情も別れのしるしも、勧誘への拒否さえも、すべてこのような心を伝える力も相手を認識する意識さえも喪失しまい。精神も肉体も凍結して動くことができない。極度の不安、混惑、恐怖心のために麻痺してしまったのだろうか。確かに、物語の終わりの二ページには、「恐怖心」(fear)を表わす言葉が多く用いられている(“trembled”, “terror”, “distress”, “nausea”, “frenzy”, “anguish”)。このようにしてEvelineを「硬直した麻痺状態」の極限まで持ってゆき、結びは直接描写ではなく、比喩的な表現によって記述される。今のEvelineの内的状況は、直接的・指示的な言語表現によっては言い尽くせない領域に属する、という作者Joyceの意図がありそうである。「話すことができない」段階よりはるかに「麻痺」は進行して、やがて徹底的な「沈黙」の状況に陥ってしまっている。この状況は、意図的にある種の多義性を賦与されて記される。

「〈しるし〉さえも表さなかった」という表現は、Evelineの母親が、息を引き取る間に狂乱状態の中で口走った意味不明の「言葉」(“Derevaun Seraun! Derevaun Seraun!”)が「意図を伝えることができなかった」ことの〈反響〉として読むこともできる。同時に、この支離滅裂な(母親の)「たわごと」の言語学的な立場からの意味解明の接近も当然のことながら⁸、この「たわごと」がEvelineに与える〈音響面・音声面〉での内的効果、影響に注目したい。なぜならば、この呪文にも似た母親の言葉はEvelineのダブリン脱出を阻む《家意識》の覚醒を促す一つの重要な契機となっていると考えられるからである。“Derevaun Seraun”の異様な音の響きは彼女を絶望に陥れるのに充分である。彼女は、必死になって〈活路〉を見出さなければ、母親と同様に、いつかは悲惨な「狂気」に陥るだろう…と戦慄する。

「〈しるし〉さえも表さなかった」——〈愛のしるし〉も、〈別れのしるし〉も、〈彼がだれであるかを認知するしるし〉もEvelineの目に示されることはなかった——。将来を恐れなければ喜びに充ちた〈愛のしるし〉があり、Frankの勧誘を己む無く拒否するのであれば〈悲哀や訣別のしるし〉が当然Evelineの目に在ったであろう。しかし、彼女は、このような感情や心を伝える力を持ってはいない。まして恋人Frankを認識する意識をも喪失してしまい、精神も肉体も凍結して動くことはない。「麻痺状態」の極みを表す言語宇宙(verbal universe)がここに繰り広げられ、物語は終結する。

V. おわりに —「麻痺」の誘因と《家意識》—

Joyceは、Evelineを〈ダブリンを脱出しなかったから〉と言って非難しているのではない。Joyceは市井に住む卑賤な人びとを扱いながら、写實的技法と「用意周到な文体」(“a style of scrupulous meanness”)によって〈真実〉を語ったのである。時折人びとは、現実の外に夢を見ながらも、大部分は空想の枠から抜け切ることができず、聖職者に左右され内紛で分裂し

8 主に次の2説がある—①“the end of pleasure is pain”を意味するゲール語が訛ったもの、②“the end of song is raving madness”を意味するアイルランド英語が訛ったもの。

た「首都ダブリン」という狭い領域でそれぞれの人生を終えるのである。《逃避》はJoyceの好む主題の一つである。この短篇集*Dubliners*の中の“An Encounter”“A Little Cloud”の主人公たちと同様に、Evelineは窮屈で悲惨な生活からの脱出を決意するのだが、最後は「麻痺状態」に陥り挫折する。ともあれ、本短篇集のすべての主人公たちの中で、Evelineだけが、海を渡り外国に行き、新生活のスタートを切る試みを実現する好機と、それを拒否する機会とを与えられた唯一の人物である。

Joyceは、*Dubliners*を書く意図を、自然主義的写実の技法をもって麻痺したダブリンの道徳史の一章を暴露するのだと述べている。当時のアイルランドはイギリスの支配下にあり、人びとはその支配に甘んじ、政治も宗教も空虚なものとなり、欺瞞が国中に満ちていた。それを告発することが、Joyceの本短篇集発刊の最大の目的であったと考えられる。

ダブリン（アイルランド）の「麻痺」の誘因となった歴史的な事実の一つに、1845年に起った「大飢饉」が考えられる。それに続いて起った深刻な財政的逼迫状態（貧困）が数百万人もの海外移住者を生み出した。一方、ダブリン（アイルランド）に残留した人びとの多くは職にもありつけず、運良く就職できた者も劣悪な労働条件（低賃金、昇任昇格の停滞など）を強いられるにいたった。とりわけ15～20歳の若者の中で「望ましい条件のもとで労働し、比較的安定した生活が続ける者」の数はごく僅かであった。「大飢饉」の4年前にあたる1841年からおよそ1世紀にわたって、アイルランドは（所謂「文明国」と呼ばれる世界の国々の中で）結婚率・出産率が世界最低を記録した。たとえ適齢期に達していても、当時の社会状況のもとでは、女性も男性も結婚に踏み切ることが至難のことであったからである⁹。

このような産業（特に農業）の不振、雇用状況や労働条件の劣悪化、最悪の結婚事情、少子高齢化の現象のほかにも「麻痺」の誘因となったものを挙げることができる。一つは宗教的・政治的「被支配」の意識である。ローマ・カトリックと大英帝国という巨大な外的圧迫と支配は、アイルランド国内にあっても「支配層」・「被支配層」という社会構造の二極分化をもたらすことになる。また、当時、アイルランドへ来た移民（とりわけイタリア系）に対する現地民の冷遇な態度も、支配された弱者の偏狭な排他主義の表れであるとも理解できる。たとえば、Evelineの父親がかつて彼女の母親が臨終の時に、戸外を流していた辻オルガン弾きに対して、“Damned Italians! coming over here!” (p. 47) と罵った言葉に「やり場のない鬱屈した心情」が凝縮されている。同時に、この罵言に、「アイルランド全土にローマ・カトリック教が浸透し尽した」という被害者意識の視点も含まれているとも考えられる。一方、家庭内にあつては、頻繁に暴力が揮われていた。父親の乱暴に時々危険を感じずるEvelineの姿が刻明に述べられている。（…she (Eveline) sometimes felt herself in danger of her father's violence. (p. 44)）

おわりに、このようなダブリン（ひいてはアイルランド）の危機的な「麻痺状態」に置かれた主人公Evelineの《家意識》について論じたいと思う。ここで〈家〉とは、家屋というよりは、むしろ、〈家族〉を指す。〈家族の絆〉でもある。

〈家〉という足枷に縛られ、気力と判断力を失ったEvelineの独身生活は、当時のダブリンの人びとの典型的な生き方であり、独身を守ることを余儀なくされたアイルランド女性の多くがたどる道でもあった。硬直した、ダブリン特有の父権制が歴然として残り続ける「閉鎖的な

9 Suzette Henke and Elaine Unkeles ed., *Women in Joyce* (Urbana · Chicago · London : University of Illinois Press, 1982), p. 33.

家」に在っては、〈家〉は母親と娘と妻の〈全て〉を求め尽くすものであった。さらには、ある種の宗教的信念に似たものが〈家〉に尽くす義務感の根源となっていたことも事実である。Frankと一緒に始めるはずの外国での新生活への憧れと夢がほのかに映し出されはする。しかし、ここには、熱い肉感的なものが漂うわけでもなく、開けた場所で清涼な風を感じされるわけでもない。〈家〉からの脱出を思いながら、複雑な側面を持った「麻痺」の誘因の縛りによって「脱出」を実行できない（否、その判断力も気力すらをも持ち合わせていない）Evelineの姿が浮き彫りになる。彼女の背後には、〈家〉という「牢獄」が見え隠れする。

第2パラグラフに見られる‘home’と‘house’の顕著な繰り返し。このような過度の反復は、物語のモチーフを強調するための一つの修辭的技法とも考えることができるが、むしろ、ここでは場面の展開を遅らせ、冗長で締まりのない悪い文体という印象を与えている。（実は、これこそJoyceの技法なのであり、主人公Evelineの緩慢な心の動きと性格とをリアルに描き出すのに大きな効果を得ている。）Evelineの〈緩慢さ〉は、まさにダブリンの「麻痺状態」を象徴的に表すものであり、また、この「麻痺状態」は、伝染病的な急激な感染力を持つものではなく、（文化・宗教・政治・経済・社会など）すべての諸相におよぶ「慢性的疾患」のような様相をもって伝染してゆくものであることを暗示している。

[付記]

- TextはJames Joyce, *Dubliners* (London : Grant Richards Ltd. Publishers, 1914) を使用した。

Bibliography

- Claire A. Culleton, *Names and Naming in Joyce* (Madison : The University of Wisconsin Press, 1994)
- Clive Hart, "Eveline," *James Joyce's Dubliners, Critical Essays*, ed. by Clive Hart (New York : The Viking Press, Inc., 1969)
- Derek Attridge, "Reading Joyce," *The Cambridge Companion to James Joyce*, ed. by Derek Attridge (Cambridge : Cambridge University Press, 1990)
- Derek Attridge and Daniel Ferrer ed., *Post-structuralist Joyce—Essays from the French—* (Cambridge · London · New York · New Rochell · Melbourne · Sydney : Cambridge University Press, 1984)
- Dominic Head, *The Modernist Short Story* (Cambridge : Cambridge University Press, 1992)
- Emer Nolan, *James Joyce and Nationalism* (London · New York : Routledge, 1995)
- Florence L. Walzl, "Dubliners : Women in Irish Society," Suzette A. Henke, ed., *Women in Joyce* (Urbana · Chicago · London : University of Illinois Press, 1982)
- John Paul Riguelme, "Metaphors in the Narration : 'Eveline'," Harold Bloom, ed., *James Joyce's Dubliners* (New York : Chelsea House Publishers, 1988)
- Katie Wales, *The Language of James Joyce* (London : Macmillan Education Ltd., 1992)
- Martha Fodaski Black, *Shaw and Joyce: "The Last Word in Stollentelling"* (Gainesville · Tallahassee · Tampa · Boca Raton · Pensacola · Orlando · Miami · Jacksonville : University Press of Florida, 1995)
- Richard Ellmann, *James Joyce* (Oxford · New York · Toronto · Melbourne : Oxford University Press, 1983)
- Shlomith Rimmon-Kenan, *Narrative Fiction : Contemporary Poetics* (London · New York : Routledge, 1991)
- Suzette A. Henke, *James Joyce and the Politics of Desire* (London : Routledge, 1990)
- Suzette A. Henke and Elaine Unkeles ed., *Women in Joyce* (Urbana · Chicago · London : University of Illinois Press, 1982)
- Vicki Mahaffey, *Reauthorizing Joyce* (Gainesville · Tallahassee · Tampa · Boca Raton · Pensacola · Orlando · Miami · Jacksonville : University Press of Florida, 1995)
- Warren Beck, *Joyce's Dubliners, Substance, Vision, and Art* (Durham N. C. : Duke University Press, 1969)